

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
みやち やすのり 宮地 康範	男 性	1 2 歳	名古屋市南区 (豊橋市)

「豊橋空襲 ～ 疎開と買い出し」

○ 我が家が灰に

戦争末期の1945年6月19日夜半、136機のB29による大空襲で豊橋市は焦土と化した。市街が平らになり、遠目からも中心地の豊橋駅舎の焼け落ちた残骸が見えた。全戸数の70%が焼失し、我が家も無残な灰と化した。

この頃、私たち家族は豊橋市の前田南町に住んでいた。父は軍馬の蹄鉄を製作する「杉田鐵工所に勤め、会社の社宅で生活していた。隣近所は軍人さんが多く、にぎやかな住宅街でもあった。雨あられのごとく落下する焼夷弾が、すぐ裏の家を直撃した。私たちの家にも焼夷弾の火の粉が降り注いできた。真夜中のこと、私たちは着の身着のまま燃えさかる炎を逃れた。柳行李を抱え、家族みんな（母と私、幼い弟二人、出産したばかりの姉）で手をつなぎ、町の避難所に向かって懸命に走った。この時、父は警防団の分団長をしていたため留守だった。6年生の私と母で安全を探しながら逃げたが、とにかく不安でたまらなかった。

町内の指定避難所の大きな横穴に全員無事に入った。しかし、この穴に危険を感じ、すぐに近くを流れる石田川（柳生川）に向かって移動した。時間の経過は全く記憶はないが、橋の下に何とか落ち着いた。どこに逃げるかは生死を分ける行動で、火事場のくそ力だと思った。

東の空が明けてきた。我が家が気になり、焼け跡を歩き始めた。柳行李を小さな体に



防空訓練 S17 豊橋市八町 東三河の100年より

くくり付け、トボトボと家に向かう。途中、ほとんどの建物は焼け落ちていた。戦禍の犠牲になった人もいた。丸焼けになった人も何人か見た。しかし、なぜか恐怖感はなかった。途中、大声で私たちの名を叫んでいた父と合流できた。父は泣きながら、「すまない、すまない。」と、何度も言った。

やはり、我が家は焼け落ち、跡形もなかった。他の3棟の社宅も同様に近辺はすべて焼け、焼夷弾のすさまじい威力を思い知らされた。何も残されてはいなかったが、家族は全員生存している。失望の中にも光明は灯っている、と考えるしかなかった。

今日からどこの軒先で雨露をしのぐのか、子ども心に思った。本当に心配だった。幸いなことに、お向かいに住んでいた方が盲学校の校長先生だった。学校は焼けずに残ったとのこと、父がお願いしたのか、しばらく校舎で寝起きさせてもらった。しかし、いつまでもそうしているわけにもいかない。10日ほどたつと、父が「明日、古里に帰るから」と家族に告げた。断腸の思いで決心したことだろう。しかし、どこの古里というのか。その時、寂しそうな姉の背中を見た。姉は生後間もない乳飲み子を連れて、岐阜の嫁ぎ先に戻ることにした。

住み慣れた豊橋を後に、友人、知人、悪ガキ、ご近所の方々との別れ、子ども心にも言い知れぬさびしさと一抹の不安を覚えた。同級生の伊藤、足立、河合、寺部の顔が浮かんだ。しかし、焼け出されたのは私たちだけではない。多くの家族が、疎開先を求めて豊橋を去ることになったはずだった。

○ 安住の疎開先はどこに？

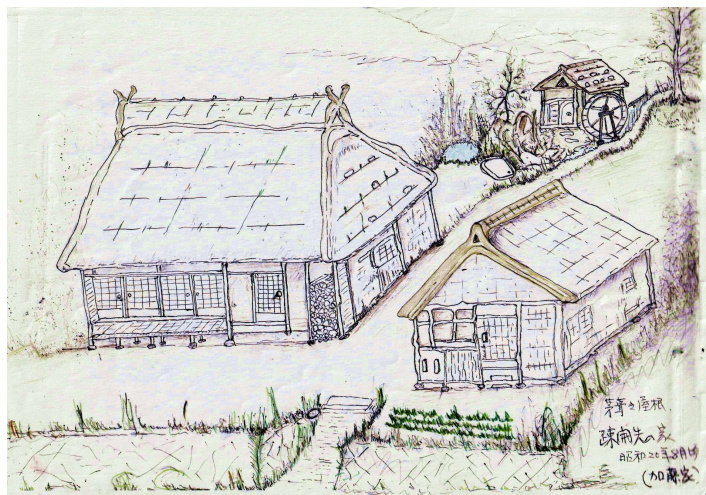
バスや電車などの動く物体は艦載機にねらわれる恐怖があり、移動に気を遣ったはずだが、何に乗ったのか記憶がない。父母と子ども3人で、最初に岡崎の父の妹の嫁ぎ先へ転がりこんだ。突然の訪問で一泊させてもらったが、翌日は挙母の母の妹が嫁いだ農家へ行った。ここでも厄介者で追い出され、次に母の在所の高橋村へ行った。しかし、そこも4、5日ですることになった。冷たくあしらわれたが、どの家でも食糧難で苦労しているところへ突然5人家族が入ってくれば困惑するのは当然で、本意でなくとも追い出すしかなかったのだろう。

そして、足助の父の古里へ木炭バスに乗って行くことになった。最初は山ごぼうを保存する倉庫に入った。2、3日後、町から半里ほど山奥へ入った田舎の村、桑田和へ行く。林業と小農が20軒ほどの村だ。農家の加藤さんの本屋を借りることになった。山の谷間の古い家で、茅葺き屋根の半分は茅が腐って崩れ落ちていた。部屋は8畳二間で十分すぎる広さだ。雨漏りぐらいは何の不満もない。空襲の心配もなく、家族が集うことができるのは涙が出るほどありがたかった。

そこでの難問は、食料事情だ。配給切符も途切れ途切れ、調味料も食卓から消えた。そして、疎開者として冷たい視線で監視される極貧の生活が待っていた。

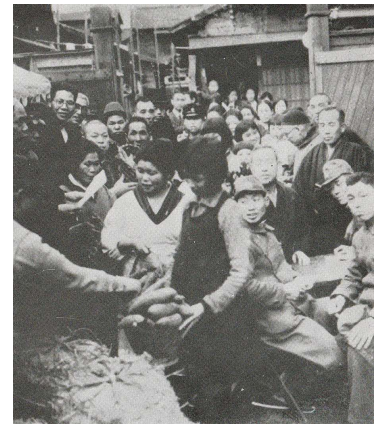
○ 買い出しの始まり

終戦近くなると生活物資、食料品などは軍部の厳しい統制があり、米や副食料などの腹を満たすべき食べ物は市場から消えていっ



疎開先の足助の民家 昭20年頃 宮地康範氏自筆画

た。食糧の入手は国からの配給を待つか、闇のルートしか手段はなかった。買い出しは生きるすべだった。破れたリュックを背負い、いつも父と二人で近在近郷の農家を訪ね歩いた。頭を下げ、食材を分けていただいた。胃袋はいつも空で、空腹に耐える毎日だった。白いご飯は長い間食べられず、夢枕に白米が浮遊した。役所からの配給物資は、小麦粉、タマネギ、乾燥イモ、トウモロコシなどで、お米は姿を見せない。調味料はぜいたく品で、食卓から完全に消えてしまった。味噌、しょうゆの配給は全くなく、我が家の味付けは塩と水だけだった。それでも貧しい庶民は、役所から配られる配給キップを一日千秋の思いで待ち、耐えていた。



配給 \$15 東京 日本生活文化史

○ 終戦の日のこと

1945年8月、真夏の153号線を父と二人で足助に向かった。配給のタマネギを受け取りに下った。歩いておよそ40分、町の中心地にある「日月もなか」の川村屋さん前の空き家で、キップとタマネギを交換した。南京袋を背負って家族が待つ桑田和に戻る途中、バスの停留所付近に来た時だった。突然周囲が騒がしくなってきた。何ごとかと思いきや、ラジオから玉音放送が流れたというのだ。日本が戦争に負けた、と声高に聞こえてきた。「神の国日本」が戦いに敗れることは絶対ないと、耳を疑った。

急いで疎開先に戻った。ラジオがない我が家の住人は知るよしもないはずだ。部屋には裸電球が1個だけ、いつもすき間からの風で揺れていた。情報の入手は、近所の人から得ていた。敗戦の重大ニュースも2、3日を過ぎた頃、本当に日本が敗れたと聞かされ、肩を落とした。

○ 土下座の買い出し

敗戦を境に最悪な食糧危機に突入した。統制が外され、自由市場にすべてが解放されたことで、物資が地下に潜ってしまった。最悪の事態だ。配給は全くなくなり、戦時中以上に食材の調達が困難になってしまった。この機から食材を求めて近在近郷の生産農家への買い出しが集中した。貨幣価値は完全に消失した。食糧の買い出しは紙幣ではなく、物資がお金の代わりになった。

灯火管制も空襲もなくなり、平和な世の中に生まれ変わったが、爆弾以上の恐怖を味わうことになった。食べ物が極端に不足する時代に突入してしまったのだ。それとともに貧乏人と富裕層の間に大きな溝が生じた。買い出しの交換物資が高級品に集約され、宝石類、高級反物類等が主役となった。農家にとっては、革命的变化が起き始めたといえる。その変化をもたらした富裕層の人たちは、タンスに眠っていた貴重品を武器に、先を争って買い出しに奔走し始めた。セレブな生活を

私たち家族は、空腹くうふくを満たすのに一日一日が必死だった。交換できる貴重品などあろうはずもない。母は幼い二人の弟の世話おきなで、買い出しには行けない。父と私の二人は寝食しんしょくをわすれて東奔西走とうほんせいそうした。幸い父の職業しよくぎようが鉄杵屋かなづちや。

玄関先で断られることはなかった。訪れた農家で、白い米の飯に申し訳ないと思いながらも、て訪れる図々しさもあった。

食料のすべてが枯れ落ち、雪に埋
まされ、さ 1 m ほどの穴を掘り、大根、
白菜、もみ殻は通気性がよく、保湿
された。しかし、農家の人にとつ
て、儲かることはほとんどない。それ
が、彼らにとっては、家族 5 人の命をつ
つと下げ、土下座をしてお願いをし
て、白菜ぐらいだったが、もらえ
ることができた。

うらやま
れまた大変だった。家族で裏山の土
りようし
(ビル), ワラビ, ゼンマイ等, 良質
土手の野草を多く食すると, その日



戦中戦後を通して、こんな過酷かこくな生活を強いられた。1944年からのことだが、1952年頃ねんごろまで食糧不足しょくりょうふそうが尾おを引いていたように思う。これが果たして貴重な体験だったといえるのだろうか。